



# 陶板名画に魅せられて ～大塚国際美術館を訪ねて～

野田 俊成・尾畑 成造

「さあ、中に入ろう。」

自身の戴冠式を描いた絵画「皇帝ナポレオン1世と皇后ジョゼフィーヌの戴冠」(ダヴィッド、ジャック＝ルイ作)(図1)を見て、ナポレオンが発したとされる一言。

壁一面の大型陶板で原寸大に再現されたこの作品の前に、私たちも陶板名画の織り成す芸術の世界に、一瞬で惹き込まれていきました。

ここは四国の玄関口、鳴門の大塚国際美術館(図2)。瀬戸内海国立公園の一部、鳴門公園内に位置し、「うず潮」と並ぶ徳島随一の名所。世界各国の名画の数々を、サイズ、色に加えてその質感までも忠実に再現した陶板名画が1000点以上並ぶ、世界で類をみない美術館です。

陶板名画とは、原画を撮影したポジフィルムを製版し、転写印刷した陶板を焼成することで、原画同様の彩色を再現したものです。これを組み合わせて、一つの巨大な絵画としています。変色、劣化がない、半永久的な耐久性が大きな特徴。焼物と絵画が融合した新たな芸術ジャンルとして着目されています。

入館して長いエスカレータを上ると、到着するのがB3F。上ったのに地下!?!と不思議に思うと、ここは山をくり抜き、地中に大きなビルを建設しているとのこと。山の麓の地下から入館して、地上に向かって上っていく構造となっているのです。周囲の景観との調和を図るため、2年9ヶ月もの歳月をかけて、自然と一体化した建築物が造られました。

いきなり圧倒されるのは、眼前に広がる、ヴァチカン市国のシステリーナ礼拝堂(図3)。ミケランジェロが4年の歳月をかけて描いた天井画が、見事に陶板名画にて再現されています。絵画だけではなく、その絵画が置かれている空間まで再現される環境展示は、この美術館の大きな特徴。大型陶板に囲まれた大展示は、ここが日本であることを忘れさせてくれます。

1998年の開館当初は再現できていなかったのが、複雑な3次曲面から構成される「スパンドレル」。10年の進化を経て2007年に完全再現されたシステリーナ礼拝堂天井画、大塚オーミ陶業の誇る、陶板技術の結晶です。曲面形状に合わせた木枠を作るところから始まり、焼成時に使用するセラミック型を作製。この型に陶板を置いて同時に焼成し、軟化する際に型に沿わせることで、複雑形状を実現しています。

500年前のミケランジェロの芸術は、最先端の技術を駆使して悠久の輝きとともに生まれ変わり、後世の人々を魅了し続けることを思うと、セラミックの奥深さを感じ得ずにはられません。



図1 「皇帝ナポレオン1世と皇后ジョゼフィーヌの戴冠」



図2 大塚国際美術館の外観



図3 圧巻のシステリーナ礼拝堂 天井画

また世界各国に点在する、各時代の芸術を一度に目にするのができるのも大きな魅力。絵画が紡ぐのは、歴史や時代背景。一堂に会することで、まさにタイムスリップしたような感覚に囚われます。

近年、来館者を魅了して止まないのは、フェルメールの部屋(図4)。「真珠の耳飾りの少女」(フェルメール、ヤン作)を始めとする代表作の数々が一度に目に飛び込んでくるのは何とも贅沢。ラピスラズリが生み出すフェルメール・ブルーは、陶板の中にも、しっかりと息づいていました。折しも、この至宝は現在来日

中で、ディズニーランド並みの行列を導く大熱狂。じっくりと誰にも邪魔されずに、絵画の世界に静かに入り込むことができ、少し得した気分です。

展示を巡る回廊の壁面、床面は、もちろん陶板製（図5）。美術館のシンボリックな空間であるセンターホールの壁面は地層を模して、地中のイメージを演出しています。

直射日光で色褪せないのも、陶板画ならではの、モネの「大睡蓮」は、鳴門の海を臨む眺望豊かな睡蓮の池と共に、陽の光の下で、その輝きが再現されています（図6）。阿波踊りで街中に熱気が溢れる8月初旬は、メダカも泳ぐ池に植えられた彩り鮮やかな睡蓮が花咲く季節（図7）。生花と芸術のコントラストは何とも華やかで、時間と共にその表情を変えて、訪れる人々を魅了します。

「夏の夜の美術館」と呼ばれる特別開館は、月明かりに照らされた幻想的な睡蓮に我を忘れることができる貴重な一時。

冒頭の「皇帝ナポレオン1世と皇后ジョゼフィーヌの戴冠」は、大型陶板の大迫力が最も生きた展示。621×979cmという、壁画を除けば西洋美術史上最大級の面積を持つ作品の一つが、壁一面に大型陶板を組み合わせ再現されています。これだけ大きいと、設置にも大きな苦勞。美術館の建築時に同時に搬入されたとのこと。大画面を支える額は、何と一体物。ウィンチで吊り上げて、下地の鉄骨に取り付けられており、陶板の荷重に耐える強度と、時代背景を損なわない風合いが両立されています。

他にも、セラミックスで木目までも再現した宗教画や、タペストリの生地感を再現した「わが唯一の望みの」、油絵の特徴である絵の具の盛り上がり状態や厚塗りにより発生するひび割れ、岩窟修道院の壁画に代表される細部にわたっての凹凸再現など、特筆すべき展示は尽きません。1枚の陶板の最大サイズは90×300cm、2万色以上の色彩表現が織り成す陶板名画の世界、機会があればぜひ体験されてみてはいかがでしょうか。展示は膨大ですが、iPod touchを使った鑑賞ガイドの貸出しもあり、海外旅行の予習にも最適。「世界遺産を巡る」、「最後の晩餐を巡る」といった、各自のテーマで陶板名画を巡ることができるのも、ここだけの楽しみ。システィーナ礼拝堂でのコンサートや歌舞伎、子どもプログラムなどの限定イベントも見逃せません。

限られた時間の取材では、膨大な展示のすべてを堪能することはできず、うしろ髪を引かれながら、美術館を後にしました。

取材に当たり、大塚国際美術館学芸員の坂本明子様、

大塚オーミ陶業営業部の大西茂昭様には大変お世話になりました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

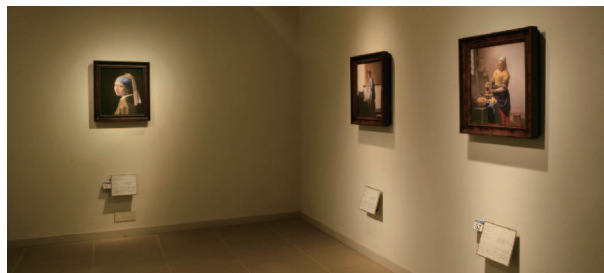


図4 フェルメールの部屋

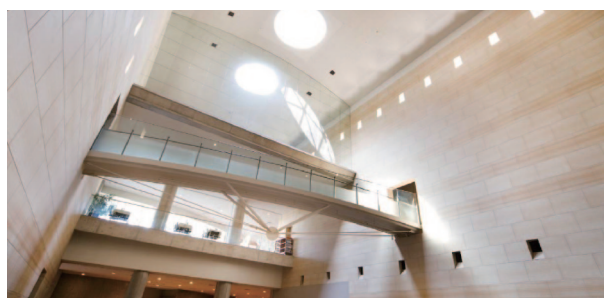


図5 地層を模したセンターホールの壁面陶板



図6 陽光が降り注ぎ輝きを増すモネの「大睡蓮」



図7 鳴門の海を望む睡蓮の池

#### ■筆者紹介 野田 俊成

パナソニック(株)デバイス社 電子部品・電子材料事業グループ

■大塚国際美術館 徳島県鳴門市鳴門町土佐泊浦字福池 65-1 TEL 088-687-3737 URL <http://www.o-museum.or.jp/>

※この記事に掲載の写像是大塚国際美術館の展示作品を撮影したものです

[投稿歓迎 - 編集委員会では「ほっと」spring 欄への会員からの投稿を歓迎します。編集事務局までご一報ください。]